
MY HAPPY DAYS

kuroyumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M Y H A P P Y D A Y S

【Nコード】

N 4 8 3 4 P

【作者名】

k u r o y u m i

【あらすじ】

中学からの友人と同じクラスになり、楽しい日々が待っている。
そんな春の日に「彼女」がやってきた。
そこから冬月くんのH A P P Y D A Y Sが加速する。

その1、冬月くん

ふゆづきひょうげん
冬月氷善。

そこそこの進学校である桜ヶ丘高等学校2年生。

新学期のクラス割りも友人の二ノ宮洋平と佐藤晃あきらがいたので
まあまあやっていけそうな気がする。

そんなとき、事件は起きた。

すずかぜりん
「涼風凜です。」

よろしくお願いします」

さらっと伸びた髪は

蛍光灯の野暮ったい光の下でもつややかに輝き、
ぱちくりとしたドングリ眼まなこ。

緊張で昂揚した頬はりんごのように赤い。

声は鈴のように軽やかに響く。

名前の通り、涼やかな空気をまとったような子だ。

無意識のうちに俺は席を立っていた。

「涼風さん」

「え？」

「俺と付き合ってください」

教室が凍った。

この転校生の自己紹介中に起きた暴挙を止めるべき教師さえ凍った。

「え・・・あ、は、はい」

ええええええー！！！！

2年3組の初めての共同作業は
まさかの”ツツコミ”だった。

・・・#・・・

始業式の間、俺は隔離され
体育教師軍団からの尋問と詰問にさらされた。

「始業式すっぱかしていいんですか？」

この1言が火に脂を注いだらしく

俺が解放されたのはその日の放課時間になってからだ（もっともその日は午前中だけだが）

教室に帰ると、男子からの”よくやった！”という熱い視線、
女子からの”変人・・・”という視線にさらされた。

「お前、すげえな」

二ノ宮はひじをつき、感心したようにつぶやく。

「で、で!？」

どーすんの、今日!？」

佐藤は子犬のようにきゃんきゃんわめく。
こういう”事件”が大好きなのだ。

「そのことだけど・・・」

女子の集団に向かって歩を進め、
親衛隊のごとく涼風さんの周りを固める連中の
毛虫でも見るかのような視線を無視する。

「涼風さん、一緒に帰らない？」

涼風さんはしぼんで消えるんじゃないかと
心配するほどちじこまった・・・が、

「・・・はい」

微かにうなずいた。

「つて、ことだから先帰っててくれ」

二ノ宮と佐藤が丸をつくったのを確認して
俺と涼風さんは2人で教室をあとにした。

・・・#・・・

涼風さんは顔を赤くしてうつむき

俺は俺でただ並んで歩くしかできない。

「涼風さん」

「は、はい」

「どうしてOKしたの？」

告った俺が言うセリフじゃないが

どうしても聞いておきたかったことだ。

涼風さんはますます赤くなり、
ゆでだこ状態になった。

俺は歩みを止め、じっと見つめる。

「・・・びっくりしちゃって」

「勢いでOKしちゃった的な？」

こくん。

「イヤなら断っていいけど」

「・・・でも」

そこで涼風さんは顔をあげた。

俺のほうが背が高いから少し上目遣い。

うるうるした瞳は反則的なかわいさ。

「これから・・・好きになるかも、だし・・・」

「じゃあ一応付き合ってもらえるってこと？」

こくん。

ここまでが限界だったのか、

それともほんとにここらに家があるのか

涼風さんは、じゃあね、といって駆け出した（逃げ出した、ともいえる）

こうして俺の新学期は最高のスタートを切った。

その2、二ノ宮くん

俺たち2人の交際関係は学校中に広まった。
正確にいうと”交際に到るまでのプロセス”が、だが。
知らない男子から、

「^{おれ}漢だな！」

と言われるのが日常になり、
女子と教師たちからは、
(双方で微妙に意味が違うが)

「危険人物だな・・・」

とささやかれるようになった。

そんな追い風と逆風にさらされながらも
交際は続いた。

交際と言っても、
涼風さんは相変わらず俺が声を掛けるだけで
顔を赤く染めるし、

2人で並んで帰るにしてもやはり会話は無い。

そんなこんなで1週間が経ったとき

例によって沈黙の帰途を歩いていると、
見慣れぬ制服が3人ほど道を塞いでいた。

俺に用があるのは

目があったときに、にたゝつと笑ったので分かった。

「熱いねえ・・・ってかうらやましいわ
なあ？」

取り巻かしき2人もなにがおかしいのかにやにや笑う。
涼風さんがずっと俺の後ろにまわり、制服をぎゅっとつかんだ。
恐怖が震えと一緒に伝わってくる。

「・・・通してもらえる？」

からまれたのは久しぶりだ。
声がかすれなかっただけで拍手もの。

「いやいや、いいやん、もうちょっとからんでや〜。
ねえ？彼女もそー思うだろ？」

ワルの耳のピアスがじゃら・・・と音を立てる。

「俺と付き合ってください！おねがいします！！」

別のヤツがさっと手を前に出し、頭をわざとらしく下げる。
耳障りな笑い声のはじける。

涼風さんの顔には恐怖が張り付き、
唇をきゅっとかみ締めていた。震えが強くなる。

(こいつら・・・っ)

俺が涼風さんに告白したのは
酔狂でも気まぐれでもない。

本気で、ホントに彼女に惹かれたからだ。

この気持ちを・・・

なにより、涼風さんをちゃかされるのは我慢できない。

「どけよ、邪魔だ」

突き出された手をパシッと弾く。

ワルの細すぎる眉がぴくっとはね上がった。

「んだよ、ちよつとからかったただけなのによ」

狭い道だ。3人に並べたら突破できない。

「手が痛え・・・誤ってくれる？」

「てめえらが誤れよ。」

人の彼女恐がらせやがって」

「はぁ！？　なに言っつつか全然きこえませうん」

怒鳴ってやろうと一歩近づいたとき

腹にずんつと衝撃がきた。

「冬月くんっ！！」

その声にしがみつ意識を保つ。

強がってはみたが、喧嘩なんてしたことがない。

ただ、涼風さんを恐がらせた連中に屈するのは
絶対にイヤだ。

顔をきつと上げたが、

2発目で再び、地面を拝むはめになった。

分かったことだ、はじめっから勝ち目なんかない。

「涼風、さん。」

もどつて。逃げろ」

「え？」

「早くっ！」

涼風さんの手を振り払う。

当然、ワルに気づかれないわけがない。

「おいおい、逃げんなって！」

伸ばされた手に身体ごとぶつかる。

そのまま2人とも地面に崩れ落ちた。

へんっ、ざまあゝ・・・マウントポジション取られたけど。

体当たりを食らわせたワルが本気で顔をぶん殴ってきた。

傷跡が目立つ顔は狙わないのが定石なのに・・・

よっぽど癪しゃくに触ったらしい。

「死ねっ！」

歯をむき出しにしてうなる。

「止めてえ！！お願いっ！！」

「うっせえっ！！邪魔すんな！！」

腫れて塞がる視界に

微かに涼風さんが叫ぶ姿が映る。

逃げろ・・・声が出せるならそう叫んだはずだ。

ふいに殴る手が止まった。

片目だけの狭い視野に見慣れた姿が映った。

二ノ宮。

マウントポジションを取ってたヤツは
両手を地面についている。

「てめえ・・・っ」

二ノ宮の革靴が立ち上がるようにするワルのあごを蹴り上げ、
寄ってきたもう一人をさらに足蹴にした。

あと1人はあっという間にやられた仲間を見て
逃げるか、戦うか判断しかねている。

二ノ宮は何の感情もない氷の目つきで
崩れ落ちたワルの手に足を乗せ、ぐっと体重を乗せる。

とうとう怖気づき、残りの1人がわっと逃げ出す。

地面にはいつくばる2人のワルは、完全に伸びている。

「大丈夫かよ、冬月。それと涼風・・・さん」

「わたしは・・・それより

冬月くん、平気！？大丈夫！？」

涼風さんが起き上がろうとする俺を

さっと支えてくれた。

制服越しに温かさが伝わる。

「あゝ・・・ありがと、平気、平気」

笑おうとするがひきつってしまふ。

不安そうな涼風さんを少しでも安心させたいのだが・・・。

「喧嘩よえーくせにやんなよつと！
おいおい、立てるか？」

二ノ宮に起こしてもらったが
ひざが揺れて立てない。

だめそうだな・・・という二ノ宮が肩を貸してくれた。
ありがたくお世話になる。

「わたしの家、こっから近いよ。
薬もいっぱいあるし」

「え？・・・やけど・・・」

”やけど”やねえやろ。

あるってんだからありがたくもらえばいいじゃねえか。
ほらっ、いくぞ」

そのままずるずると半ば引きずられるようにして
涼風さんの家に向かった。

・・・こんな形で行くことになるのは、ね。残念といえば残念。

その3、涼風さん

「あいつらの処理してくる」

二ノ宮はそういつて、涼風さんの家をあとにした。居間に残された俺は視線をさまよわせる。

その時、手に薬を抱えた涼風さんが戻ってきた。

「大丈夫？」

心配そうに、悲痛な表情で尋ねてくる。今にも泣き出しそうなその顔を見るほうが傷の痛みよりよっぽどこたえる。

「じっとしててね」

ツーン、と鼻につく薬品を塗ってもらっているあいだしみて辛いやら、なんかくすぐったいやらで複雑な気持ちになる。

「・・・がっかりした？」

俺がしたことと言えば殴られてただけ。

二ノ宮の助太刀がなければ今ごろどうなっていたか分かったもんじゃない。

「わたしは・・・喧嘩に強いことがカッコいいことだなんて思わない・・・」

二ノ宮・・・立場ねえなあ・・・。

「あ、二ノ宮くんに感謝はしてるよ？もちろん。
・・・でも、」

”でも”？」

「冬月くんも・・・あ、ありがとう・・・」

「・・・」

視界が塞がってるのをひどく後悔した。

今、涼風さん、めっちゃかわいい顔してるんやろうなあ・・・。

そのあとは、お互い一言も発しなかった。

ただ、居心地のいい沈黙だったのは間違いない。

・・・#・・・

わたしもいくよ、という涼風さんに

別れを告げ、二ノ宮の肩にお世話になりながら帰途につく。

「次お前らに手え出したらぶっ殺すっつといたから」

「ああ」

南部中学校。通称南中。

”南中の二ノ宮”と言えば、どうしようもないワルだった。

喧嘩にタバコ、酒・・・教師すら手がつけられない札付き。

そのワルがどうして俺の友人になり、

そこそこの進学校桜ヶ丘高校に入ったのか・・・

それはまた別の話。

「・・・なんか

ぼこられた割りに元気そうじゃね？」

「いやいや・・・、

で、どうしてあっこにいたわけ？尾けてた？」

「アキラじゃねーんだからよ、んなことするか！

・・・ケータイ学校に忘れてったろ？

お前ん家に届けに行ってやったらさ

その帰りにばったり、ね」

「へえー・・・ま、ありがと。

助かった」

二ノ宮はへいへい、と投げやりに答える。

それでもさり気なく俺の歩くペースに合わせてくれてるのが

二ノ宮の性格だ。

何事もちゃっちゃとするのが好きなやつにとって

今のカタツムリ並みのペースはいらいらするやろうに・・・。

「涼風、さ・・・」

二ノ宮が突然口を開いた。

「いい人っぽいな。

お前が殴られてたの、必死に止めようとしてたぜ」

「・・・二ノ宮」

「ん？」

「とるなよ」

「振り落とすぞ」

二ノ宮はイケメンだ。しかも、かなり。

元、1年1組のメンバーの間では

バレンタインで二ノ宮がチョコを20個もらった

という話は有名だ（佐藤談なので若干疑わしい・・・）

「前なら逃げてたのにさ、どうして今回は
そうしなかったわけ？」

「好きな人を守るくらいの甲斐性は、ある」

「・・・・・・よくそーゆーセリフを恥ずかしげもなく・・・
本気で惚れたわけね・・・つまり・・・」

「ああ」

そのあとは口を聞くこともなく

黙々と歩いた。

俺の家についたとき、じゃ、とお互い短く言って別れた。

その4、佐藤くん

翌朝、人目を無視しながら学校に行き、
2年生の教室が集まる階に踏み入れたときから
同級生たちの妙な視線が突き刺さるのを感じた。

教室に入ったとき、沈んだ顔の二ノ宮と
嬉々とした佐藤とばちつと目が合った。

「おいおい冬月、昨日さゝ・・・うつ！」

佐藤の頬を指で万力のごとく締め上げる。

「二ノ宮・・・この歩くメガホンに何しゃべった？」

「すまんっ。」

昨日のこと・・・話しちまった・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・まじ、ごめん」

教室の戸が開き、涼風さんが
友人たちと入ってくると、わっとその周りを女子がかこむ。
ピーチクパーチク話してやがる・・・・・・・・。
まさか・・・

「佐藤、女子に話しやがったな」

「いー加減放せ！いって・・・・・・・・。」

ってかさあ、いいやん！

あれやろ？涼風さんに絡んできたワルを

お前がぶん殴ったんやろ？

かつこいいいゝゝゝ。ひゅゝひゅゝ」

周りの席から似たような歓声（奇声？）があがる。

「すまん・・・俺よりお前がやったって言ったほうが
格好がつくかと思ってさ・・・」

二ノ宮がこそつと耳打ちしてきた。

佐藤は、俺（本当は二ノ宮）の武勇伝を聞きだそうと
わーわー騒ぐし、他の男子も聞き耳立ててやがる。

ちらつと涼風さんの席に視線を移すと

困ったね、というふうに微笑んでくれた。

こっちも思わず微笑む。

「わっ、わっ、アイコンタクト！

アイコンタクトですか？今の！？」

「黙れメガホン」

机に突っ伏して寝る体勢へ。

どうやって佐藤を黙らせるか考えながら

静かに目を閉じた。

・・・#・・・

「なんだ・・・ホントは二ノ宮が助けたんかよ」

「俺が喧嘩強いわけないだろ・・・考えろよ」

「なんだよ、つまんね」

放課後、何か聞かれる前に佐藤をひっ捕まえて歩きながら昨日の事件に真相を話す。

佐藤は北部中学の出身だが、

二ノ宮の喧嘩の強さを知っていたので面白く無さそうに納得した。

ま、真実なんてそんなものだ。

「今日、彼女と帰らないの？」

「友だちと遊ぶんだってさ」

「ふーん・・・なあ、冬月」

「なん？」

「もうキスした？」

「けっ躓^{つまず}いた。

本当は動揺してだが

佐藤は石にでも躓いたとでも思ったのかダサッ、と鼻で笑う。

「・・・まだ」

「まだあ!？」

「おま・・・えっ・・・マジで!？」

「悪いかよ」

悪かねえけどさ・・・と佐藤は口を尖らす。

「もう一ヶ月やろ？」

こう・・・一緒にいてなんとも思わんわけ？」

思わないわけじゃない。

手をつないでみたいと思うし

キスもしてみたい・・・やけど、

なんだろう？

涼風さんを”そういう対象”にしたくない。

傷つけたくない。

「・・・そーゆープラトニックな関係に憧れんのも分かるけどさ

むこうだってイヤイヤ冬月と付き合ってるわけや

ねえんやからさあ、キスくらい、いいんやねえの？」

「そう・・・かなあ？」

うんうんと頷き、

佐藤は交差点で立ち止まった。

「ま、せーぜー頑張ってくれ。
じゃ」

そういい残し、

俺の心の中に妙な葛藤を残して店内に消えた。

その5、冬月さんと涼風さん

ゴールデンウィークは例によつて

宿題ともに叩き潰され、5月病に

苦しみながら生徒たちは今日も登校してくる。

そんなある日のことだった。

「ちみの彼女は休み？」

昼休み。

学食でベーコンもびっくりするほど薄い

自称”カツどん”を食つてるときに佐藤が突然切り出した。

「口ん中のもんが見えてんだよ、キタねえなあ。

・・・冬月、カツ喰わねえならくれ」

「くいたかったら、どーぞ・・・まずいよ？」

ハイエナ2人があつという間もなくカツを平らげる。

俺は残った卵ご飯をもそもそ口に運ぶ。

「・・・今日体調が悪いらしい」

弁当をかつこむ佐藤を見て、

答えなくてもいいかな、とも思ったが一応答える。

案の定、どーでもよさ気な返事しか返さない。

「で、今日CD買いに行くんやろ？」

佐藤、金持ってきたか？・・・また貸すとかいややけな」

佐藤はきよとん、としてる。

また忘れたな、こいつ……。

ところが、二ノ宮まで目が点になっていた。

「お前……見舞いにいかねえの？」

「は？」

「いや、涼風さん家に」

「いや……体調悪いんやから
押しかけたら迷惑やろ」

「はあ？」

「お前、彼氏やろ？行けよ」

佐藤が二ノ宮に助けを求めるように
視線を送る。

二ノ宮も相槌を打った。

「今回”は”！アキラに同意」

「なんで”は”を強調する……？」

「行ってやれよ」

「でも……」

佐藤がふう、と息をはく。

・・・なんかムカつく。

「あんな告り方したやつが奥手って・・・ありえんやろ」

「・・・そーやな、うん。」

アキラ、たまにはマトモなこと言うなあ」

「当の本人ほっというて勝手に話進めんのやめてくれ」

じゃあ・・・と佐藤、二ノ宮が同時に口を開く。

「い・け！」

こいつら楽しんでやがる・・・そう直感した。

・・・#・・・

来てしまった。

あまり思い出したくない事情で

一度来たことがあったおかげで道は分かった。

ピンポーン・・・と脳天気な音の後

しばらくして、はい、とかすれた声が返ってきた。

「あ、俺だけど・・・」

「え？ふ、冬月くん！？」

ちょ、ちょっと待ってねっ」

ガチャン！痛ッ！

呼び鈴越しに慌しい音がする。

・・・小指打ったな、今。痛そ・・・。

5分ほど妙な緊張感を抱えて突っ立っていると
ドアの開く音がした。

玄関を見ると、ジャージ姿の涼風さんが立っていた。
と、言うよりパジャマの上にジャージを引っ掛けた感じ。

「ごめんね！待たせちゃって」

動揺してるのか、病気のせいか・・・
顔は例によって朱を差したように赤い。

「いや、押しかけた俺のほうが悪いし・・・」

「・・・こんなところで話すのもあれだし・・・
上がる？」

「あ、じゃあ、お邪魔します」

こうして俺は妙な気分を抱えたまま
涼風さんの家に足を踏み入れた。

その6、冬月さんと涼風さん part 2

「どう？体調は・・・」

「あ、うん。だいぶ良くなったよ。」

「明日には学校いけそうな感じ」

「そう。」

「良かったやん」

「うん」

「当たり前障りの無い会話しか思いつかない。」

「もうちょい気の効いたことが言えればいいのに。」

「テーブルの上には昼食が置いてあるが」

「どうも食べかけらしい。」

「それを見てピーンときた。」

「あ、」

「え？」

「もう何か食べた？」

「昼からずっと寝てたから、何も・・・」

「お粥つくろっか？」

「できるの？」

口に出してから失礼だと思ったらしい。
小さく、ごめんね、とつぶやいた。

その様子を見て思わず苦笑い。

「俺、1人暮らしだからさ料理結構いけるんよ」

「そうなんだ・・・じゃあお願いします」

「OK」

キッチンは見事に整理整頓され、
汚れがまったくくない。

「冷蔵庫開けていい？」

「いいよ〜」。

それに、開けないとできないよ〜」

リビングからくすくす笑いとともに
軽やかな返事が返ってくる。

そりゃそうだ。苦笑して冷蔵庫を開けた。

自分の調子が悪い時はカップうどんで済ますから
お粥をつくるのは実は初めて。ま、つくり方は知ってるけど。

「へえ、上手だねえ〜」

ひよい、と後ろから涼風さんが覗き込む。
くりくりした目を感じたように丸くしている。

「うまくなんないといつまでも
マズイ飯しか食えんからね、いやでも上手になるよ」

「わたし料理とかさっぱりだから感心しちゃう」

「なんか意外」

「それ皆にも言われる。

どうしてそんなふうに思われるのかなあ？」

わいわい騒ぎながら作っていく。

にこやかに微笑みながら話す涼風さんを見ていて
自分が訪れたことが迷惑になってないことが分かり
心の、精神的な距離がぐっと縮まった感じがした。

「できた」

おー、とぱちぱち手を叩く涼風さんの前に
お粥のおわんを置く。

「おいしいっ！」

ひよいひよい口に運んでいく。

1人暮らしのため

料理をしてもだれもおいしいとは言ってくれない。

そのためか涼風さんの何気ない一言が
心をほんのり暖めた。

「ごちそうさま」

涼風さんがおわんを手にとり立ち上がった。
と、突然、がくつとひざが折れた。

「あっ」

立ち上がり、手を出して涼風さんの身体を支える。

小さな太陽のような・・・そんなぬくもりが手を通じて伝わる。
おわんが床にあたり、音を立てる。

《もう一ヶ月だろ?》

涼風さんの黒の瞳に自分の顔が映る。

《キスくらい、していいんじゃないの?》

唇が蜜をぬったようにつややかに光る。

ごくっとなどを飲む。

「冬月くん・・・」

「・・・だ、大丈夫? 涼風さん! ?」

いや、急によろけるんやけん、びっくりしたっ」

「え?」

うん、大丈夫よ。急にふらふらとしちゃって・・・
ごめんね」

はははっと笑いあう。

ひきつった笑いだったが、気を紛らわすためには
笑うよりほか方法がなかった。

「じゃあ俺、帰るわ。

明日また学校で」

「うん。じゃあね．．．．．」

心臓が口から飛び出しそうになる。

この音が聞かれる前に涼風さんの家をあとにした。

．．．#．．．

びっくりした．．．．．。

冬月くんの手が肩に触れ、互いの瞳を覗き込めるほど近づいた。

そっと自分の唇に手をあてる。

「冬月くん．．．」

わたしたち付き合ってるんだよ、ね？

いつも考える疑問が今日はやけに鮮やかに脳裏をよぎった。

その7、冬月くんと涼風さん part 3

「じゃあ今週の土曜ってか明日ね・・・うん。

2時、映画館の前ってことで・・・うん。じゃ」

ふう・・・。

メールを見てみると、二ノ宮からだった。

《いまからバッティングセンターにいかね？アキラもくる》

いまから・・・？

二ノ宮のやつ今日の放課後は用があるとか言ってたくせに。金曜の放課後に用があるとか可哀想だな、というので覚えている。

どの道、明日のことを考えると遊ぶ気にはなれない。

断りのメールを送ってケータイをテーブルの上に投げ出す。

梅雨も終わったこの時期。

付き合い始めてはや3ヶ月・・・やつとか・・・
デートにこぎつけたのは・・・。

・・・#・・・

「冬坊、冬坊！」

「・・・止めましょうよ、その”冬坊”っていうの」

「いいっちゃ！気にすんなっ！

俺から見たら高校生なんてまだまだよ」

商店街の人は1人暮らしの俺にやけに優しい。

慣れ慣れしすぎやしませんか？と思うことも（たまに）ある。
特に、魚屋の兄ちゃんあんは自身が苦学生だったらしく
なにかと世話を焼いてくれる。

「これ、彼女と行って来な」

手渡されたのは映画のペアチケットだった。
ってかその前に・・・

「どっからその情報を・・・？」

「八百屋の佐藤ちゃんが話してくれた」

佐藤やろつ・・・っ。

「頑張れっ！！」

ぐつと親指を立て、
魚屋の兄ちゃんが満面の笑みを浮かべた。
しかし、

これはデートに誘うチャンスでは・・・？

こうして付き合いはじめて3ヶ月。

ようやくデートにこじつけた。

・・・#・・・

電車で20分も揺られてればつく市街地。

桜ヶ丘高校の生徒たちはここ以外に遊ぶところもないので
よく来る。友だちとだったり、デートしたりで。

遅れちゃマズイと思って一時間も早く来てしまったが・・・

早すぎたかな？

土曜というだけあって人が多い。

ひまを持て余したのでチケットを見てみる。

【銃雨／＼冷たい雨／＼】

タイトルを見ても内容がまったく読めない。

へんなのじゃなけりやいいけど・・・。

「あ、冬月くん」

「・・・あれ？涼風さん？早いね」

ショートパンツに、上は黒でぼっちり占めていた。

銀色の蝶のアクセサリーが胸元で光る。

まさかのパンク系？

「な、なんか変？」

涼風さんは顔を赤らめ、もじもじしながらつぶやく。

「いや／＼・・・別に・・・。

似合ってるやん」

実を言えばもうちょっとふわっとした感じかと思ってたんやけど・・・でも、いい。

「・・・え／＼と、じゃ行こっか」

「うん」

少し前のお見舞いに行ったことには触れず

当たり障りの無い、会話を続ける。

お互いあまりしゃべらない性格だと分かったおかげで、ちよっとした沈黙でおたおたと妙に慌てることもなくマイペースでいられるようになった。

相変わらず腕もつながないし手もつながないが、それでもいいか・・・とぬるま湯につかってるような気分になっていた。

・・・#・・・

結論から言うと映画は最悪だった。

いきなり銃撃シーンから始まり、ラブシーン。

銃撃、ラブ、銃・・・の繰り返し。

なにより最悪だったのは・・・

俺がこの映画を意図的にチョイスしたと

思われてんじゃないかと気が気じゃなかったことだ。

ガラッガラのお客様にぼつぼつ座るのはカップルばかり。

くすくす笑いとともいちゃつく声が聞こえる。

内容なんか欠片も見えていない。ちよっと違う場所がいちゃつきたかっただけなんやろうな・・・。

途中で席を立つのも変に意識しているようやし

・・・できない。

気まぐさの頂点で耐えるのは非常につらかった。

・・・#・・・

「・・・」

「・・・」

映画の内容を話してシメにする予定やった。

話せる内容の映画やったらの話やけど……。

出会ったばかりのころ以上の沈黙の中で市街地を歩く。

最悪や……あんな内容やなんて知らなかったなんて

言っても、白々しい言い訳にしか聞こえんやろうし……

初デートでこんなことになるなんて……。

景気のいい音が聞こえてきたのはそんな時。

「バッテリーグセンター……？」

「こんな所に？」

興味を引かれたらしく、涼風さんが

首を傾げながらつぶやいた。

「ああ……小さいけどね」

自己嫌悪でそれどころじゃない俺は短く答える。

「ね、行ってみない？」

「え？」

「行ってみよっ、冬月くん。

時間もあるし」

涼風さんはぱつと腕を取り、なかば強引にバッテリーグセンターに引きずっていった。

……#……

「わたし、こういうの初めて」

はしゃぐ姿は普段からはまったく想像できない。
今にも飛び跳ねそうなくらい嬉しそう・・・。
落ち込んでた俺が馬鹿みたく思えてきた。

「100キロはキツイやろ。」

もうちょい遅いほうがいいんじゃない？」

「そう？」

んゝ・・・じゃ、80キロ」

止める間もなくゲージの中に入った。

こいつ、そういつて構える姿は意外にさまになってる。
俺のほうはゲージの外で高みの見物。

「うわっ！意外とはやい」

「どうする？かわろっか？」

「いや、見てて」

真剣に構え、ぐっと力を込め、
そして・・・振りぬく。

威勢のいい音とともに白球が放物線を描く。

「見た！？今の」

ぱっと花が咲いたような笑顔。
思わず見とれる・・・けど、

「涼風さん、次、次くるっ」

「え？わっ！」

くすくす笑いが止まらない。

映画のことなんかすっかり頭から抜け落ちた。

ちよつと不満そうだが、涼風さんがゲージから出てきた。

あまり打てなかったのがくやしかったらしい。

「あ」

「どしたの？」

「あれ、優ちゃん？」

視線の先にはショートカットのカジュアルな服装の女子が1人。

「美鷹さん？みたか空手部の主将のキャプテン」

「うん・・・1人でどうしたんだろ・・・？」

「声掛ける？」

「・・・ううん。」

「なんか・・・必死そうだし」

確かに。

連れがいるわけでもなさそうやし、何より、楽しんでる感じやない。
野球部がこっそり練習している感じ。

俺も涼風さんも首を傾げながら、静かに別のゲージに移った。

・・・#・・・

「おもしろかったね」。

でも、冬月くん、料理もバッティングも両方上手なんだね」

「まあね。両方長くやってるし。

涼風さんも結構うまかったよ」

「あ、上から目線」

「俺のほうが上手いんだからしょうがないやろ」

涼風さんはむうっと頬を膨らませ、口を尖らす。
そういう仕草にどきっと心臓が音を立てる。

「次来たときはわたしのほうが上手くなってるかもよ？」

「”次”？」

「え？」

またバッティングセンターはいや？」

「あ、そういうことやないよ。

・・・そうやね、次来た時楽しみにしとくわ」

「うん」

次・・・ってことは、またデートできるってことだよな？

涼風さんの横顔をちらつと見る。

そして、細く、白い手を・・・。

そっと、できるだけ意識しないよう自然に手を・・・握った。

涼風さんは目を丸くして俺を見た。

赤くなりはしたが、そのままぎゅつと握り返してくれた。

涼風さんの手の体温を感じながら、余計な口は
きかずに、静かに並んで帰った。

その8、美鷹さん

わたしは美鷹優^{みとかゆう}。桜ヶ丘高校2年生。

空手部の2年の主将にも選ばれ、成績は良。

文武両道を目指し、これからも奮闘するつもりだ。

2年生になった時の”あの事件”を除けば

生活はいまのところ順調。

冬月氷善^{ひようぜん}。

どうでもいいやゝ．．．みたいなあの目つき、

ものごとをいつも一步引いたところから眺める姿勢が気に食わない。

しかし、ごく普通の男子かと思っていたら”あんなこと”を．．．。

下品なやつだ．．．．．。

転校生の涼風凜^{すずかぜりん}は

性格もまじめで何事も一生懸命な明るいこだ。

なぜ彼女が冬月^{やつ}と付き合っているのか、

いまだによく分からない。

佐藤晃^{あきひろ}。

ただただ騒がしいヤツ。

軽い口調に軽い態度．．．ほら、まただ

黒板の前にたって一発芸をやってる．．．罰ゲームらしい。

男子は腹をかかえて大笑いし、下品な野次をとばしてる。

まあ．．．こいつはいい、どうでも．．．。

問題はこいつだ。

二ノ宮洋平^{ようへい}。

だらしなくボタンを開け、着崩した制服、

本人は否定しているが、わたしはあの髪は

明らかにワックスを使っているとにらんでいる。

人づてに聞いた話だと

かつてどうしようもないほどの不良だったという。

真面目を装ってはいるが、猫被ってるだけだ。

わたしが一番嫌いなタイプ。

我慢の限界だ。

あの曲がった根性を叩きなおすには空手しかない。

意を決してかねてからの計画を実行した。

その9、美鷹さんと二ノ宮くん

「なんか用？美鷹^{みたか}」

「单刀直入に言おう。」

二ノ宮洋平、空手部に入れっ！」

「丁重にお断りいたします」

くるっと身をひるがえし、帰ろうとする。

逃がすものかっ！

襟首をつかんで引き寄せる。

「勘弁してくれよ・・・」

もんのすごく嫌そうな顔。

不良のうえに根性なしか！？腹立たしい。

「いいか！？もう一度言う！

空手部に入れっ！！」

ぐっと顔を近づけ、一言一言

叩きつけるように言葉を投げつける。

「村上イ！トモ！それから・・・アキラ！！

こそこそすんなっ！出てこい！」

顔を上げると、慌しい音とともに
やべえ・・・っ！という数人の声。

こいつ、背後の気配を察してたのか？わたしでさえ気づかなかったというのに！

「待てこらあ！」

わたしの手を振り払って二ノ宮がぱつと駆け出す。
はやい！とても帰宅部とは思えない脚力だ。

と、言っても逃がすつもりはさらさらない。

わたしも追いかける・・・がすぐ見つかった。

二ノ宮は佐藤にフェイスロックをがっちり決めていた、
・・・ほかの連中は佐藤きょうはんしやを置いて逃げたらしい。

「痛ててて、ギブ、ギブ！」

「な～にやってんだあ？ああ！？」

覗きか、え？」

「佐藤晃あきら・・・趣味が悪いぞ」

ばたばた暴れる佐藤をにらむ。

「わ、美鷹さん、その目止めよーやあ！

怖い怖い」

「俺の質問に答えろ！」

「いやあ～さあ・・・お前が美鷹さんと
歩いてるの見てさ、珍しい組み合わせやな～と思って。
村上とトモ誘って・・・へへっ」

「へへっ”じゃねえよ！
ただのストーカーじゃねえか！」

呆れた。ここまで軽いやつだとは……。
二ノ宮がため息をついて佐藤を解放した。
ただ、佐藤はなぜか逃げない。

「美鷹さん、さっきの話だけどさ、
勝負して決めない？そのほうがお互いに納得できるやろ」

「てめえ・・・他人事だと思って・・・」

二ノ宮が詰め寄ったが
佐藤は手の届かない所にさっと逃げる。

「勝負？」

少し興味を引かれた。

確かに勝負で決めれば二ノ宮も言い訳できまい。

「いいやろ？これで。」

その代わり何で勝負するかは二ノ宮が決める・・・どう？」

「わたしに異論はない。さあ、二ノ宮！決めろ。
何でも受けてたってやろう！」

佐藤とわたしとで二ノ宮に詰め寄る。

「なあ、2人とも・・・
冷静になろう・・・な？」

その10、美鷹さんと二ノ宮くん part 2

金曜の夕方。

市街地には明日が休みだということもあって夕方にも関わらず学生たちの姿もちろほら見受けられる。

「なんだ、なぜ学生服を着ている！」

「まあまあ、美鷹。」

それより早く行こう、アキラ待ってるからさ」

わざわざ家に帰って動きやすい服装に着替えてきたのに。それよりも……

「どこに行くつもりだ？」

「バッティングセンター」

二ノ宮はひよいひよい歩いていく。
歩きなれてるところを見る限り、
市街地こじにかなり来ているのだろう。

「バッティングセンターって知ってる？」

「馬鹿にしてるのか？」

「いやいや……」

ってか美鷹、お前にらんだらめっちゃ恐いな
……冬月みてえ」

「なにっ!？」

なぜわたしがあんなやつと同類なのだ!」

そのとき、ふいに二ノ宮が足を止め、振り返った。

「俺の友だちを

” あんなやつ” 呼ばわりすんの止めてくれる・・・?」

氷のような感情の無い目。

しかし、その奥の怒りに気づいて思わず息を呑む。

言葉を継げず、黙ってしまった。

そのまましばらく歩くとカキーン・・・と

景気のいい音が聞こえてきた。

「ほら、着いた。行こうぜ」

さきほどまでの表情は消え

何事も無かったかのように二ノ宮は口を開いた。

・・・#・・・

「どりゃー!!」

「おおーっ、いいじゃん、アキラ。

・・・見事な空振り」

「まあね」

同じく制服の佐藤がゲージから出てきた。

「二ノ宮、冬月は？」

「ああ、これねえって」

「えーなんだよ、つまんねえー」

2人のそんな会話を尻目に

わたしは初めて入るバッティングセンターをじっくり眺めていた。
ふんっ、ボールを打ち返すだけだ。簡単だな。

「美鷹さーん。

勝負の説明してもよろしかー？」

「語尾を伸ばすな。

・・・話せ」

「ん。

勝負は10球の内何球ホームランできるか・・・あの赤いのに当てたらHRね」

佐藤が指した先・・・ネットの上のほうに赤い的がついていた。

二ノ宮はといえはすでにバットを持ってゲージの中に入っていた。
速度は130キロ。

佐藤はフェンスにもたれてやいやい言ってる。

まあ、とりあえずお手並み拝見するか。

快音が響く。

バットが振りぬかれるたびにボールは白い矢となって飛んでいく。

「すげえやろ」

「佐藤晃」

「ん？」

「貴様、まさかわざと勝負の話を・・・」

「10分の7か、まあまあじゃね？」

二ノ宮がゲージから出、ベンチに腰掛けた。

佐藤がマネジのごとく側に寄り、缶ジュースを差し出す。

「お疲れさまでございますう。これ、大好きなオレンジジュースですう」

「ごくろ」

「あ、これ美鷹さんの分」

「いらん！」

差し出された缶を押し返す。

10分の7？それがなんだ！不良に負けるわたしではない！

「いや、さっきから変な汗かいてるから。

ってか大丈夫！？ほら、これ飲んで」

「そ、そこまで言うなら・・・」

舌がもつれる。緊張してるのか？わたしが！？

二ノ宮がすつと腰を上げる。

「美鷹」

「な、なんだ!？」

「野球やったことあるか？」

「ない！」

のどがからからだ。

上がりやすい性質だが、空手ではその緊張を練習で打ち消してきた。
だが・・・バッティング!? やったことなんかあるか?!
缶が手から滑り落ちる。

「ならこんな勝負受けんなよ・・・」

二ノ宮のつぶやき声を無視し

派手な音を立てて転がる缶を引っつかみ、力にまかせて開けた。

「あっ！」

佐藤の叫びがわたしの耳に届いたのと

缶から噴き出した黒い液体が顔に飛び掛ってきたのは同時だった。

「・・・Oh」

「”Oh”じゃねえよ! アキラッ！」

薄い服を着てた。そう・・・薄いのを・・・。

コーラは見事なまでに服をぬらし、
……婉曲させて言えば、下着が透けて……。

「これ着ろ！」

学ランが勢いよくかけられる。

「うっ……あ、あり……すまん……」

「おう。」

アキラ、お前どっかでタオル買ってこい」

「分かった。」

美鷹さん、ごめんな」

そういうと佐藤はさっと駆け出し、あっという間もなく消えた。
二ノ宮は興味津々の野次馬たちにひとにらみを効かせ、
明後日のほうを向かせた。

「……とりあえずこっから出るか。」

店になんか文句言われる前に」

確かに……辺りはコーラまみれ、
他の客もこちらの様子が気になってしょうがないらしい。
軽い営業妨害だ。
ただ……、

「勝負はどうするんだ？」

「その格好じゃやれねえだろ」

「だが！」

「じゃあ延期だ、延期。ほら、いくぞ」

手早く金を払ってバッテリーングセンターをあとにした。

・・・#・・・

「俺の学ラン着てんだし、付いてかないわけにいかないだろ」

確かに。だが・・・

「佐藤晃は、いいのか？」

「メールした」

「家に行ったらわたしの親に殴られるかも・・・」

「・・・まあ、殴られんのは慣れてるからな」

「それに・・・」

「あのさあ」

二ノ宮はふいに立ち止まり

夕日を背負ってぼりぼりと頭をかいた。

「今回のことは悪かった。」

だからさ、詫びさせてくれよ、な？

それに自分の娘がコーラまみれになって帰ってきたらビビるだろ」

「・・・貴様が誤ることじゃない。

どっちかといえば・・・というより100%佐藤晃のせいだろ」

矢のようにまっすぐな視線に思わず目をそらしてしまった。
なぜだ？心臓が妙な音を・・・。

「・・・アキラはさ、悪いやつじゃないんだ。

メールでもさ心配してた。美鷹のこと・・・」

相変わらず視線をそらさずに二ノ宮がつぶやいた。

「どうしてそんなに庇うのだ？友人のことを」

冬月を”あんなやつ”と呼んだときのあの冷たい目を
思い出す。

今、二ノ宮は奥の見えない・・・だがどこか暖かな目をしていた。

「どうしてってねえ・・・」

「・・・」

視線を下に向け、首を傾げる。

真剣に考えているらしかったが、答えは意外なほど早く返ってきた。

「友だちだから、だな」

「友だちだから・・・か。単純だな」

「・・・・・・・・まあ、ね」

どこか遠くを見るその目は不思議な光を湛えていた。

・・・・・・・・#・・・・・・・・

大丈夫だから、そういつて二ノ宮を（なんとか）家の前で
説得し、別れた。

幸いなことにまだ誰も帰っていないらしく
さっさと服を着替え、そのまま自室のベッドで横になった。
変なやつだ・・・・・・・・だけど・・・・・・・・。。。

「わたしの早とちりだったな」

そういえばいつ再戦するのか、日程を聞いてなかった。
だが、その前に、やつと・・・・・・・・二ノ宮とまともに勝負できるように
特訓だな。

幸運なことに明日は部活もないし・・・・。

胸踊り、気持ちりが昂揚する。

思わず鼻歌を歌いたくなるような不思議な、心地いい気分のまま
わたしは静かに目を閉じた。

その11, 冬月くん

「きみにこれを授けよう」

えばって渡されたのはキーホルダーもなにもない、汚れたただの鍵。
相変わらずこの先輩のすることは読めない。

「はあ・・・どうも・・・」

とりあえず受け取る。

「何その反応」

口を尖らせ、不満げな態度丸出し。

「いや、だって・・・いらねいです。これ・・・」

「あんた全然分かってない」

出来の悪い生徒を相手にした教師みたく
先輩はため息を1つ。

昼休みに急に呼び出された俺の休み時間はどうなる・・・？

「いつかわたしに感謝する日が来るんよ」

「・・・」

「じゃね」

そういつて俺を残し、自由の塊のようなその先輩は卒業していった。
これは俺がまだ1年のときの話だ。

・・・#・・・

夏休みを控え、どことなく浮つく学校の中で、屋上^{こう}だけは
いつもと同じ景色が広がってる。

昼のうだる暑さも、時折思い出したように吹き抜ける風が打ち消
し、

どんよりしたクーラーの何倍も涼しい。

屋上に誰かを自主的に連れてきたことはない。

二ノ宮や佐藤も同じく・・・。

どうしてかと言われると答えにつまる。

皆と騒ぐことが嫌いなわけじゃない。むしろ楽しい。

屋上を独り占めにしたのか・・・？

もちろん違う。ただ、誰にも来て欲しくない。それだけ。

・・・#・・・

「あれ？冬月くんは？」

「ん？・・・あっ、涼風さん！

びっくりびっくりっ！」

ははっ、と思わず笑いが出る。

変人やけど、悪人やないんよ・・・そう言った冬月くんの言葉が脳
裏を駆ける。

横で携帯をいじっていた二ノ宮くんが

佐藤くんの頭をはたき、何すんだよ！という叫びをさらっとながす。

「意味分からん反応すんな、質問に答えろ。」

・・・冬月は、屋上におると思うよ、涼風さん」

「ありがとう、二ノ宮くん・・・あ、佐藤くんもね」

「いやいやこんくらいお安い御用」

横から二ノ宮くんのにらみを無視して佐藤くんはけろっとしてる。
でも・・・この学校に屋上なんかあったっけ？

「あ、ちょっと待った」

ふいに呼び止められ、振り返ると

二ノ宮くんがのどに何かつまったような、苦虫を噛み潰したような・
・

そんな微妙な表情をしてた。

「今はいかんぼうが・・・」

「え？」

二ノ宮くんの口を突然佐藤くんの手が塞ぐ。

出かかった言葉の代わりに、佐藤くんのにこゝつとした笑顔が出現する。

「お気になさらず、どぞ。いってらっしゃい」

「うん・・・いってきます?」

後ろから物騒な・・・具体的にいうと、

わっ！やめろ、首絞めんな、二ノ、宮・・・。

という声が聞こえてきたけど、大丈夫なのかな・・・佐藤くん。
とりあえず、屋上をめざして5階に行ってみることにした。

・・・#・・・

「いた」

丸めた背中しか見えないけど、どこか遠くを眺めているのは分かった。

顔だけをこっちに向け、わたしが屋上にいるのがそんなに衝撃的なのか
目を軽く見開いた。

「涼風さん・・・どしたの？」

普段からあまりテンションの高いところはみたことないけど
今日、このときは特別低い気がする・・・気のせい？

「CD返そうかと思って」

「そう・・・ん、ありがとう」

「良かったよ、このCD」

「そう・・・」

「うん・・・」

「・・・」

なんだろう・・・この感じ・・・。
言葉にしなくても、びしびし伝わってくる。

1人にしといてくれ・・・と。

・・・#・・・

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、1人で階段を下っていく。

涼風さんをないがしろにしてしまった。

今更ひどく後悔した・・・後の祭りやけど・・・。

ああ・・・そうだ。俺がどうしても屋上に誰も・・・

友だちも涼風さんでさえ来て欲しくない理由。

あの先輩・・・俺に屋上の鍵をくれた、赤羽^{あかばね}さんのことが

忘れられないんだ。

「冬月くん」

軽やかで弾むような声。

視線の先にはにっこり微笑む涼風さんがいた。

「5時間目は移動教室だよ。はい、これ」

「あ、うん・・・ありがとう」

そういえばさっきも言ったな”ありがとう”って・・・。

けど、今の”ありがとう”は申し訳なさが全体の9割を占めてる。

「あの・・・涼風さん、さっきは・・・」

「いや、その・・・ごめんね。」

冬月くんの気持ちも考えずに押しかけちゃって・・・」

申し訳無さそうな顔をされると俺の立場がない。

「暑いねーってか熱い。最近の天気はいかがでしょうか？二ノ宮キヤスター」

「振るな・・・でも、まあ、熱い・・・な」

教科書をかかえた例の2人が通り過ぎざまに言い残す。

2人が去ったあと、俺も涼風さんも顔が火照って黙り込んでしまった。

ちくしょう！誤る機会無くした！

「い、いこっか？」

なんとかそれだけ言って、うなずいたのを見てから歩き出した。

その12, 3人組

「夏休み初日に宿題全部終わらせるって・・・小学生か」

もともとこのことを言い出したのは佐藤だ。

俺の家でやろうと言い出したのも佐藤だ。

そしていいだしっぺのくせに宿題にちっとも手をつけてないのも佐藤だ。

「おい、ゲームばっかやってんじゃねえよ」

「佐藤、俺んちの布団引っ張りだすなよ」

俺と二ノ宮からの小言にも一切耳を貸そうとしない。

「冬月くんのお布団気持ちいい」

「気持ちわりいんっちゃ・・・ほらっ、離れろ。
ヒツキムシか、お前は！」

狭い空間の中で1人でもだれてるやつがいると
そのだら気オーラは伝染するもんで、1時間もしないうちに
俺も二ノ宮もシャーペンを手放すはめになった。

「そういえば二ノ宮ってさ、方言使わんよな」

「は？」

寝転がってモンハンをやってた佐藤がむくっと起き上がった。

「あ、それ俺も思った。

” だけど” とか” そうだ” とか・・・標準語丸出し」

「どこがわりいんだよ」

「悪くはない。

ただ、” だけど” は” やけど”」

佐藤が次の言葉を継ぐ。

「” そうだ” は” そうっちゃ” やろ？」

「違いが微妙すぎる・・・」

俺も佐藤もつい納得してしまった。

・・・#・・・

方言レクチャーはもういいよ・・・二ノ宮はそういつて帰り、
佐藤は、お前ん家じゃ宿題すすみやしねえ、と心外な捨て台詞を吐
いていった。

夕方のことなくわびしい空気の包まれ、

部屋を赤に染める太陽をぼさっつと眺めていた。

ピンポーン・・・。

誰だ？

玄関に向かうほんの1分も経たない間に何度も何度も
呼び鈴が疲れるだろ！といいたくなるくらい鳴らされた。
なぜか胃の中に暗雲が広がっていくのを感じた。

ドアを開けた瞬間、懐かしすぎる顔がいた。

「やつほゝ、お久しぶり〜」

暗雲から大雨と雷がとどろいた。

その13、冬月さんと赤羽先輩

「うん。うまい！」

やっぱあんたの淹れる緑茶はうまいは」

「はぁ・・・どうも」

この先輩が納得する緑茶を淹れるようになるのにどれだけ文句を言われたことか・・・。

この耳の鼓膜は少なからず罵倒されすぎてダメージを受けている。

「で、二ノちゃん元気？」

「二ノ宮は元気ですよ」

「まだヤンチャやってんの？」

「もうやってないです。今は真面目な学生ですよ」

「なんだ、つまらん」

ちっ、とほんとにつまらなそうに舌打ちをした。

この人の力が無ければ二ノ宮は今頃ヤクザにでもなってたかも・・・
そう考えると赤羽先輩に感謝しないといけないんやけど・・・うん。

「で、どうなの？」

「なにがですか？」

先輩が食い散らかした菓子をゴミ箱に放り込む。

「あたしにフラれたあとのこと」

「……人の傷口に塩ぬりこんで楽しいですか？」

先輩がけっけつと悪の参謀のような笑い声をあげた。

まあ、このひとに倫理とか道徳とか求めんのが間違いやな。

「用がないなら帰ってください」

「おやおや。冷たいねえ」。

これからしばらく同じ屋根の下で暮らすわけだし、その態度はないんじゃない？

「……は？」

片付けの手を止める。思考は止まる。

クラス。くらす。暮らす！？

先輩は相も変わらず人を喰ったような表情を浮かべている。

「あ、あたしの家族も知ってるから。

『ふゆちゃんならOKよ』だってさ。相変わらずのん気よね。
いまどきの高校生なめなって感じ？」

「ちょ、ちょ、まっ……どういう！？」

「取り乱しちゃってからに。らしくないぞ」

” ♪ ” やねー！！ ってか、やっぱこの先輩ひとといるとペース乱される。

「夏休みの間だけだから心配すんなくて。
じゃ、これからよろしくね」

もはや俺には神も仏もないことを悟った初夏だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834p/>

MY HAPPY DAYS

2010年12月14日00時04分発行